

⑦宗片 恵美子氏（特定非営利法人イコールネット仙台代表理事） ～女性リーダーの育成と意思決定の場への女性の参画～

イコールネット仙台は 2003 年に設立された NPO で、男女共同参画の視点を持って活動する市民活動の支援を行っています。

地震には常に危機感を持っていたため、2008 年に仙台市内の女性 1,100 人を対象に「災害時における女性のニーズ調査」を実施し、「女性の視点から見る防災・災害復興に関する提言」を取りまとめ、自治体や町内会等への提言を行ってきました。背景には阪神淡路大震災で明らかになった女性たちの数々の困難があります。

だからこそ、東日本大震災が起こったときはすぐに行動に移せました。避難所でのニーズを女性たちから聞き取り、必要な支援につなげていきました。NPO だからこそできた支援です。殆どの避難所のリーダーは男性で、女性の声が届かない状況でした。女性自身も我慢しなければと思ったため、非常時に我慢をすることが蔓延していました。仮設に移ってからは、気持ちが弱っている女性のためのサロン活動を行いました。思いを言葉にして共有すると気持ちが楽になります。震災の経験は大きく陰を落としています。心のケアは本当に大事です。

その後「東日本大震災に伴う「震災と女性」に関する調査」を実施しました。1,500 人の女性達の記録を残すと共に、女性の被災時・復興時をめぐる課題をまとめました。まずは、妊婦や障害者等支援を必要とする人が避難所に来た時に、必要な支援が得られなかったことが問題でした。避難所には健康な人しかいられない状態で、本当に支援が必要な人達の多くは親戚・友人の下に身を寄せていたのです。次に、女性の声を受け止めて必要な支援に繋ぐ女性のリーダーが欲しかったという声が挙がりました。その他、車中泊や自宅避難者への支援の問題や地域の中のコミュニケーションがいかに関わっていたかが問われました。被災者も支援者です。人を孤立させない地域とはどうあるべきかを改めて考えさせられました。

この調査で、復興計画の策定の議論の場に女性の参画が必要だと答えた人が 85% もいました。女性の視点を反映させるために盛り込むべき内容としては、第一に困難を抱える人のニーズを踏まえたきめ細やかなサポートを整備し、地域の中で支えあえる仕組みづくりを行うことです。第二に、女性の防災リーダーの育成です。地域に残されたのは殆ど女性達でした。彼女たちはマンパワーとして地域を支えています。リーダーとしてのトレーニングもスキルもなかったため、行動に移せなかったのです。第三に、男女の責任者を配置することをマニュアル化することで、女性達がリーダーとなる道筋をつけることでした。

防災計画の作成には、地域性を踏まえることが重要です。そのため、2012 年 8 月に避難所のワークショップを行いました。実際に歩いてみることからはじめ、地域にはどんな人が住んでいるのか、障害者が避難所に来たときどんな不自由を抱えるか、自分達はどんな支援ができるかについて話し合い、知恵を出し合い、設計図を描きました。

これらは、外部の NPO ではなく実際にそこに住んでいる人が行うのが一番です。そのため 2013 年～2015 年に「女性のための防災リーダー養成講座」を開催し、3 年間で 100 人が参加しました。5 回の講座受講後、地域で防災の取組みを実践する長期的なプログラムです。あの困難を二度と繰り返してはいけないという思いから、各地の被災地に広がりました。女性防災リーダーネットワークも設立され、情報交換、研修等を通じて支えあうネットワークが広がっています。

2015年3月の国連防災世界会議で採択された「仙台防災枠組」は、女性を含め一人ひとりが防災の主体とされており、私たちのよりどころとなっています。女性、障害者に限らず一人ひとりの内面にあるリーダーシップを引き出すことが重要です。また、2016年3月にはシンポジウムを開催しましたが、そこでは女性防災リーダーが自分達が十分に地域の担い手になりうることをアピールしました。また、今年の熊本地震では、女性の運営リーダーが女性の視点を生かした避難所運営を行いました。現在は仮設に移っているようですが、今後も自分たちの経験を活かしていただきたいと思います。

※イコールネットで実施（作成）したもの：災害時における女性のニーズ調査（震災前）、洗濯代行ボランティア、女性のためのサロン活動、東日本大震災に伴う「震災と女性」に関する調査（震災後）、避難所ワークショップ、女性のための防災リーダー養成講座、女性防災リーダーネットワーク、第3階国連防災世界会議でのシンポジウム、発信！女性防災リーダーの実践と可能性

